

新潟女学校と成瀬仁蔵 —キリスト教教育をめぐって—

片桐 芳雄

名誉教授

Niigata Female School and Naruse Jinzo: Concerning Christian Education

Yoshio KATAGIRI

Professor Emeritus of Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

1. 女子教育への情熱—『おんな女子のつとめ職務』の増補改訂

「余を神ハ選ンデ女子教育ニ用ゐん為めに、前より定め玉ふるを知る故ニ、此の事も常ニ忘る可らず。¹⁾」梅花女学校教員を辞任して約1年余りたった1883(明治16)年10月20日の日記に、成瀬仁蔵は、このように記した。大阪から赴任した大和郡山で布教活動に従事しながら、彼は女子教育への情熱を失うことはなかった。

経営がきわめて困難だった梅花女学校、その経営方針をめぐる対立で成瀬はその教員を辞したのだったが、より社会に受け入れられる女子教育のあり方とは何か、そもそも、教育すべき女子の使命(「職務」)とは何か、彼は、自問自答した。

成瀬は、布教活動に専心しながら、梅花女学校教員時代に出版した『おんな女子のつとめ職務』(以下「初版」)の原稿に手を入れた。

この改訂作業は、いつごろ始まり、いつごろ終わったかは明らかではない。しかし少なくとも、新潟への出発以前には改訂原稿が完成した。新潟赴任後、1886(明治19)年10月12日付の、成瀬宛の澤山保羅書簡に「御出立前マ婦女之職務校閱御命有之²⁾」(傍点・片桐)とあるから、成瀬は、新潟に立つ前に原稿を完成し、これを澤山保羅に託し、校閲と序文を依頼したのだった。

病中の澤山は、その原稿をじゅうぶん閲読することができなかった。上の手紙は、その断わりのためのものでもあった。澤山は、たまたま見つけた3か所の誤りを指摘しただけだった。

かくして『増補・おんな女子乃職務』(以下「増補版」)は、澤山の死後、梅花女学校長も務めた大阪の官立第三高等中学校(89年に京都に移転して第三高等学校の前身となる)教諭田村初太郎の序文を得て、87年8月

30日に出版された。書名は、初版と異なり「ふじよしのしよくむ」とルビが付された。

初版から増補版へ、本文は62頁から84頁に(但し1行の文字数が27字から25字に減少)、およそ1.2~1.3倍に増えた。日本・中国の古典や、さらに欧米の例え話や事例が増加し、内容が豊富になった。例えば第1章「婦人の真価」で、「一世を聳動せし著書にして婦人の手になれるもの少からず³⁾」(初版では「実に有益本を著した女も多くあり」)の例として、『アンクルトムの小屋』の著者ハリエット・ストウの名が挙げられた。文章も、より練れて、読みやすくなった。上記澤山書簡の表現を借りれば、初版の「簡易質朴ナルモノ」から「文飾も有之」のものになった。

増補改訂の中で最も目を引くのは、第3章「家庭の重任」に、「妻ハ其夫に従順なるべきこと⁴⁾」と題する節が、新たに加えられたことである。

儒教の三従の徳はもとより、当時一般に求められた従順の「婦徳」に対しても批判的であった成瀬が、この節で「妻」に求めたのは、「夫」に対する一方的な従順ではなかった。妻に求めたのは、「柔和」と「謙遜」である。二つの例え話が挙げられているが、それは、「正直にして謙遜の心深」いが「才智稍鈍かりし」夫を尊敬しない、「性質烈しき」妻の事例などであった⁵⁾。対等にして円満な夫婦の心得、といった内容であった。

そして、次の「婚姻の大切なる事」という節では、初版を改訂し、「婦人の夫を撰ぶべき心得の箇條は略左の如し⁶⁾」と、結婚の心得を、もっぱら女性の立場から、具体的に述べた。女性の側も、結婚について、受動的にではなく、主体的に考えることの必要を強調したのだった。初版の項目にさらに1項目加えて早婚の弊害を述べ、男性は25歳以上、女性は20歳以上の結婚を勧めた。

大和郡山で布教活動に専心していた成瀬が、その一方でこのような改訂作業をしていたとは、率直に言って驚かざるを得ない。

しかし梅花女学校の運営と教育に、実質的に一人で全責任を負った成瀬は、そこで得た充実感を忘れられなかったであろう。彼は、女子教育にかける情熱を、胸中深く畳み込んでいたのだ。

神は、自らを、女子教育のために、選び定めたのだ。冒頭の引用で成瀬自ら記したように、女子教育は、成瀬の、いわば「天職」であった。いつかはその現場に立ち戻りたい。その想いは、かえって強くなっていったのではないか。

その想いを胸に、彼は『婦女子の職務』の改訂作業を行っていたのであろう。

2. 新潟での新たな出会い

「彼は1886年夏に越後に赴任するや、さっそく女学校—いわば「越後の梅花女学校」—の設立を模索し始めた⁷と、本井康博は述べている。しかし新潟赴任直後の成瀬にそんな余裕があったかどうかは、不明である。

そもそも、新潟に赴任した成瀬に託された使命は、別稿で述べたように⁸、あくまでも二派あるいは三派に分れて対立する教会問題の解決であり、キリスト教の布教に全身全霊を捧げることであった。

しかし成瀬仁蔵の新潟赴任には、思いがけない、新しい、嬉しい出会いも待っていた。この出会いが、意外に早く、彼の女子教育への夢を目覚めさせることになった。

出会いの第一は、長州出身の富田禎二郎との邂逅である。

富田禎二郎は1848（嘉永元）年生まれで、成瀬のちょうど10歳年長であった。1869（明治2）年に司法省留学生としてイギリスに留学し、74年帰国後は内務省勸業寮に勤務した。75年にはアメリカ建国100年を記念してフィラデルフィアで開かれる米国博覧会の御用掛を務めるなど国際通官僚として活躍し⁹、76年には農学教師雇入れのためイギリスに派遣された¹⁰。その後司法省に移り、判事、少書記官を経て、山形始審裁判所（のちの地方裁判所）長から、86（明治19）年9月8日に新潟始審裁判所長として新潟に赴任したのであった¹¹。

富田は、たんに長州出身であったと言うだけではなく、成瀬の従兄・佐畑信之が個人的に親しかった木戸孝允とも親交があった。彼はイギリス留学中、岩倉使節団の一員としてロンドン滞在中の木戸に面会し、帰国後に北海道開拓に従事することや、留学期間延長等を頼み込んでいる¹²。司法省留学生にもかかわらず、帰国後に勸業寮に出仕できたのは、富田の意を受けた参

議木戸の働きかけによるものかと思われる。

新潟に赴任した富田は、始審裁判所長として、さっそく精力的な活動を開始した。英国帰りの新知識として、「人民の便利」を図るため、裁判所改革にその能力を発揮し、被疑者の段階で市中を「引廻し」たり「晒し」たりする悪習をやめさせるなどした¹³。『新潟新聞』がしばしば報道した富田の積極的な活動は、当然、成瀬の知るところでもあったろう。

新潟県大書記官（現在の副知事格）近藤幸止との出会いも奇縁であった。近藤は、倒幕に功あった伊勢亀山藩家老の子で、岩倉使節団に同行して渡米したという点で、富田同様木戸と接点があった。帰国後は内務省官僚となり、『兵制学』や『政治学』などの翻訳書を出版した。しかも彼は、84（明治17）年に新潟県に赴任する以前は、山口県大書記官であった¹⁴。新潟県赴任後は、新潟県有志教育会会長に就任した。

86年7月の地方官官制によって初代新潟県知事となった薩摩出身の篠崎五郎も教育には熱心であった。

『成瀬先生傳』によれば、「先生が牧師として来任すると、時勢に促されて、英語を習ひに来る人が多かつた。中には禿頭の老爺もあれば、妙齡の処女もあり、白髪紅顔相交はる有様であつたが、殊に高級官吏の夫人令嬢などが多かつた¹⁵」と言う。成瀬とともに新潟で布教活動をしたアメリカ人宣教師D.スカッターが執筆したとみられる「北日本ミッション第四年報告」には、富田について、ロンドンのキングズ・カレッジの卒業生で、キリスト教に理解があり、「彼の母親と娘は、教会に通い始めた¹⁶」とある。富田の母親や娘が教会に通い始めたのは、英語を習うためでもあったろう。篠崎五郎や近藤幸止の妻も、後述の新潟婦人懇親会の発起人の一人であった。

このようにして、新潟赴任後の成瀬は、思いがけない偶然も手伝って、当地の高官と個人的にも交流するようになり、この関係はやがて新潟女学校設立へと発展した。彼らは同校設立の発起人として名を連ねることになった。

富田や近藤らの洋行帰りの官僚たちは、キリスト教に理解があり、英学教授をする女学校の設置に好意的だった。東京では85（明治18）年に明治女学校など、欧化主義の女学校が設立されている。新潟にもそうした学校があっても良い、彼らはそう考えた。

しかし県民の学校教育、特に女子教育への理解は低かった。84年の『文部省第十二年報』所載の「新潟県年報」では、学齡児童就学について「然レトモ尚憂フヘキハ女兒就学ノ甚タ寡少ナル是レナリ。惟フニ中等以下ニ在リテハ家業ヲ帮助シ又ハ子傳ニ従事セシムル等其原由一ニシテ足ラスト雖トモ、職トシテ従前女兒教育ヲ無用視セルノ弊習猶未タ全脱セサルニ由ラサルハナシ¹⁷」（ルビ・片桐）と述べていた。県会を動かし県費を支出し、県立の女子中等学校を設立するなど、

望むべくもなかった。

他方、スカッターらアメリカ人宣教師たちは、女学校設立に、もとより協力的だった。ボストンのアメリカン・ボード本部に要請し、女性教師一人を派遣して授業を無償で担当することが計画された¹⁸。

10月2日の新潟第一基督教会設立によって、懸案の教会内部の対立に一応の決着がついて以後、徐々に、女学校設立に向けた動きが始まった。

3. 新潟女学校設立主意書の発表

「今度篠崎五郎、富田禎二郎、近藤幸止、永澤正常、鈴木長蔵、佐瀬精一、阿部欽二郎、成瀬仁蔵の八氏が発起者となり新潟英和女学校なる者を設立さる、よしなるが今其趣意書を得たれば左に掲ぐ」¹⁹。

1887（明治20）年2月27日の『新潟新聞』は、このような書き出しで、「新潟英和女学校主意書」の全文を掲載した。発起者中、永澤正常は、近藤と並ぶもう一人の県大書記官であった。

発起者の一人鈴木長蔵は、実業にも政治にも幅広く活躍した明治期新潟の先覚的知識人である。『新潟新聞』の社長を務め、のちに新潟市長や衆議院議員にも選ばれた。S.R. ブラウンが教師として赴任した新潟英学校を前身とする新潟学校の経営や、新潟商業学校の設立にも関わった。佐瀬精一は、会津藩士・佐瀬得所の次男で『新潟日日新聞』の主筆・社長であった。彼は83年に改進黨系の『大阪新報』記者から新潟に赴任し、89年には函館で発行された『北海』の主筆になり新潟を離れた。新潟でも改進黨系の論客として活躍した²⁰。

阿部欽次郎は成瀬の、新潟における盟友というべき人物である²¹。彼は新潟英学校でブラウンに学び東京の工部大学校に入学したが病気で新潟に帰省後、私立新潟英学校を創設した。成瀬と出会った阿部は、87年5月1日、成瀬によってキリスト教の洗礼を受け、英学校を発展的に解消して、成瀬とともに、キリスト教主義の北越学館を創設した。

新潟で、私立の中等学校設立に苦闘した経験を持つ阿部は、成瀬にとって頼もしい同志であった。

「新潟英和女学校主意書」は、まず、「夫れ社会の源ハ夫婦なり。君臣父子兄弟姉妹親族朋友は乃ち夫婦より生じて社会を成すものに外ならず。是を以て忠臣孝悌仁愛等の美德は夫婦の行状より養はれ来るものなり」と書き始める。「社会の源」としての夫婦の意義を強調し、子どもが持つべき美德は、親たる夫婦の行状によって養われるのだから、「夫婦の行状ハ社会に影響すること亦た大ならずや」と説く。

ついで第2段では、そのような夫婦を単位とする「真成の家庭」をつくるためには、女子の教育がぜひとも必要であると主張する。夫婦が「相敬」「相愛」し、苦

楽を共にすることのできる家庭を作るには、「夫婦の教育互に平均を得」る必要がある。よって、「苟くも本邦をして真成の文明国たらしめんと欲せば専ら力を女子教育に用ひざる可からざるを信ずるなり」（ルビ・片桐）。

そして第3段では、女子と男子とに必要な教育の違いを述べる。「女子には女子の職分あり」、女子のための教育は、「賢母」を育てる教育でなければならない。それは、「禁酒禁烟会」や「貧民病院」などによって、「風俗矯正」し、社会に貢献する女子を育て、その地位を向上させるためでもある。

最後の第4段では、他府県と比べて新潟県の、女子教育不振の現状を批判する。そして「嗚呼我県下愛国の士よ、我国家の為に、我同胞姉妹の為に、応分の義金を捐て、以て此の挙を賛助せられんこと、切に冀望に耐へざるなり」（読点、ルビ・片桐）と、県民に呼びかけて終るのである。

本井康博は、この主意書の執筆者は、成瀬以外には「考えにくい」と述べる²²。確かに、8人の発起者の中で、このような女子教育観を述べることができたのは、成瀬以外にはなかったかもしれない。しかし、そもそもこの主意書は、8人の発起者連名のものである。しかも新潟英和女学校の構想自体、成瀬一人のものではなく、富田や近藤ら県高官らとの協議の中から生まれたものであった。

牧師として、教会問題に苦慮し、布教活動の中で仏教王国新潟の保守性を痛感した成瀬にも、梅花女学校のように、独立自給主義で女子中等学校の設立・運営ができるとは、考えにくかったであろう。彼もまた、広く寄付金を募ることに賛同し、その趣旨を生かした主意書を書いたのではないか。したがって、キリスト教教育への言及はなく、逆に、主意書の冒頭のように、県民一般に理解されやすいよう、「君臣父子…」や「忠臣孝悌…」といった儒教的表現が使われた。このような儒教的表現は、梅花女学校教員時代の著書『婦女子の職務』ではまったく見られないことであった。

ちなみに「主意書」が発表された少し前、2月13日の同じ『新潟新聞』には「婦人懇親会」と題する社説が載った²³。これは11日に篠崎知事の妻・篠崎キチ子や近藤書記官の妻・近藤サダ子らによって、「専ら婦人の風俗を改良する」目的で結成された新潟婦人懇親会に関するものであった²⁴。

社説は、このような会が結成されたことを評価しつつ、「男尊女卑の弊風」を破ろうとすることが、「極端に趨り従来の良習慣をも併せ失ふ」ことがないようにと、釘をさすことを忘れなかった。「夫唱婦随ハ一家和合の大原則なり」「素とより夫婦同権杯云ふことハあらざるなり」と。

これが、時代の、そして新潟の状況だったのである²⁵。

4. 新潟女学校開校へ—新潟女学校規則の発表

3月に入り女学校設立の動きは加速した。

3月17日には、旧パーム病院でスカッター主催の懇親会が開かれた。成瀬も所感を述べたこの会には、近藤書記官とその妻や尋常師範学校長はじめとする県官や、おそらく裁判官の富田禎二郎らとその妻のほか、阿部欽次郎が設立した私立新潟英学校の生徒たち、合わせて178名もの多数が出席し盛会であった。これを報ずる『基督教新聞』の記事は、同時に「彼の新潟英和女学校設立も多くの賛成者を得、目今資金募集中なるに今日既に六百圓余の寄附金あり」と伝えた²⁶。

3月27日には近藤書記官の邸宅に発起人が集った。「追々賛成の有志者出来り寄附金も漸次其数を増加するに至りたれば今月下旬にハ開校の運びに及ぶべき見込なり」（ルビ・片桐）²⁷。

3月30日午後7時からは新潟の、今にも残るイタリア軒で発起人による集会が開かれた。新潟英和女学校の設立につき「諸般の事を議し」たが、ちょうど仙台から来たアメリカ人宣教師デフォルトらも出席し、スカッターとともに演説した²⁸。発起人らと宣教師らとの交流が深まっている様子がうかがえる。

かくして4月28日の『新潟新聞』は「新潟女学校の開業式」と題して、次のように報じた。

「兼て報道せる新潟英和女学校ハ、今度新潟女学校と改称し、来五月廿一日午後一時を以て開業式を挙行することに決せしが、当分ハ旧営所内に仮校舎を設け（尤も別に寄宿舎を設く）授業する筈にて、校主ハ鈴木長蔵氏に、校長は成瀬仁蔵氏に、英語教師ハスカツダル令嬢に、音楽教師はドリマス・スカツダル氏に、本邦教師は野村はぎ、長谷川さくの二氏に決せり。尤も幹事及び裁縫、割烹の両教員は近日定めらるゝ筈なりと。又別に米国より二名の女教員を聘する都合にて、其人々は来る六月桑港を出発し来港する趣き、又右開校式の際ハ京都同志社長新島襄氏も来港する筈なりとぞ²⁹」（読点追加・片桐）。

これによると、学校名をこれまでの「新潟英和女学校」から「新潟女学校」と改称したこと、5月21日に開業式を行なうこと、仮校舎を県が管理する旧営所に置くこと、校主は鈴木長蔵、校長を成瀬仁蔵とすること、英語教師はスカッターの姉で宣教師のC.スカッターが務め、音楽はスカッター自身が教えること、開校式には新島襄が出席する予定であること（結局は実現せず）などが述べられている。

ここで注目すべきは、学校名から「英和」が消え、県が管理する旧営所に仮校舎を置いたことであろう。まさに官民一体で学校が設立され、これに応ずるかのようになり、キリスト教はもとより、西洋色を示す語が校名から消えたのである。有能で、柔軟な精神の持主だったスカッターも、これに賛成したのである。

かくして開校を10日後にひかえた5月12日の『新潟新聞』紙上に、「新潟女学校規則」が発表された。全6章、総計24条である。

第1章「校則」では、教育目的を「本校は女子に必要な教育を施し其天賦の美質を養成する所とす」と規定した。

第2章「入学」では、「小学」「予科」「本科」「専修科」の4科が置かれること、小学科は尋常小学校（当時は4年制）程度の教育を行なうこと、予科の入学資格は13歳以上で小学科を修了していない者、本科は予科修了者又はこれ相当の学力がある者に限る、等のことが規定された。

第3章「学科課程」では2年制の予科と4年制の本科の課程表が示された。予科の科目は修身、読書、作文、英語、数学、習字、地理、図画、音楽、内外裁縫、内外割烹、体操、内外作法の12科目、本科第1学年では、これに音楽が加わった。本科第2学年では、習字と地理の代わりに科学が加わった。第3学年の科目は、第2学年と同じであるが、第4学年では、修身と読書の代わりに簿記が加わった。

そして第5条には「生徒ハ凡て毎朝半時間宛公会に出席し道徳上の講話を聞かんことを要す」とある。

さらに第4章以下、「費用」「学暦」「賞罰」が規定され、第5章学暦では、学期は9月から12月、1月から3月、4月から6月の三期制で、日曜日のほか土曜日も休業となっている。

さて、「新潟女学校規則」において、まず第一に注目すべきは、キリスト教との関係である。第1章の教育目的の規定には、上引のように「天賦の美質を養成する」とのみあって、キリスト教への言及なく、第3章第5条で出席を義務付けている毎朝半時間の公会での「道徳上の講話」も、キリスト教精神に基づくものとは明示していない。また学科課程表でも修身の時間は示されず、その内容も、単に「口授」とあるのみである。

もっとも『成瀬先生傳』に、「毎朝始業前三十分づつ礼拝といふことがあつて、聖書に就いての講話や、祈祷が行はれた³⁰」とあるのは、上記の「公会」のことであろう。また、「先生は極めて大胆に基督教を説き、その主義を發揮した。日曜毎に、隊列を組んだ女生徒を引率して、教会に臨んだ容子などは、町の人々の眼を聳てさせたといふことである³¹」（ルビ・片桐）とも言うので、学校規則には現れない実質的なキリスト教教育が行われたものとも思われる。

しかし同時に「訓育は基督教主義に由るとは言つても、併し此処では学生の信仰に対して、以前よりも寛容な態度をとり、自然に養はれて、生長して来るのを待つやうな赴きがあつた³²」とも述べているので、キリスト教信仰への、成瀬の生徒に対する態度は、梅花女学校とは異なるものがあつた。

他方、学科課程に関しては、科目などを見ると、基本的に梅花女学校での経験が生かされたものと思われる。

特に「科学」の設置に見られる理学教育の重視は、梅花女学校以来のものであるが、科学の教科書目として、2学年では植物学が、3学年では生理学と物理学が、4学年では看病法や育児法が使用された。最終学年の4学年でこのような書目が使用されたのは、簿記が置かれたのと同様、実用的な教育を重視したためと思われる。

そして、当時唯一の官立女子中等教育機関とも言うべき、東京女子師範学校（現お茶の水女子大学）附属高等女学校（以下・東京高女）の同時期のそれと比較してみると³³、①東京高女の5年制に対して4年制、②土曜日休業のためもある、1週間の合計授業時数が東京高女の30時間に比して若干少ない、③東京高女にない英語が5時間ある、④その分他の科目の授業時数が若干ずつ少ない、⑤にもかかわらず体操に5時間充てられている（東京高女は2時間）、⑥逆に裁縫は東京高女の4時間に対して2時間である、といった特徴をうかがうことができる。

修業年限を除けば、総じて、少なくとも文面上、東京高女に比して遜色なく、むしろ「日本旧来ノ女子職分及習慣³⁴」の漸次改良を図ろうとする文部省の方針に対して、新潟女学校の場合は、英学の教授はもちろん、裁縫や割烹の科目名にあえて「内外」と冠したように、西洋への関心に基づく幅広い教養教育をめざした、と言えよう。なお、体操の重視は、のちの日本女子大学校にも引き継がれる成瀬の身体教育への関心の高さが窺われて、興味深い。

上記の学校規則が新聞に掲載された翌5月13日に、県からの設立認可が下りた。そして、その日、開校に向けた最後の打ち合わせ会議が、近藤幸止邸で開かれ、いよいよ21日の開校式を迎えることとなった³⁵。本来ならば9月開校にすべきところを、この時期に早めて開校したのは、「九月まで待てない人たちを満足させるため³⁶」だった。

5. いよいよ開校

5月21日の開校式は、『新潟新聞』によれば、次のように挙行された。

「今度創立せられたる新潟女学校にてハ、兼て記せし如く、昨廿一日午後一時を以て、営所内なる第五十七番戸講堂内に於て、開校の典を挙げられたり。校の前面にハ緑門を設け、校内各教室並に式場の窓戸ハ、悉く常磐木を以て粧飾されしさま、流石に質素にして久しきに耐ふるの状の顕はれて、最と愛度もまた奥床しくハ見受けられにき。来賓ハ県官、裁判官、郡区長、各学校教職員及び区内紳士紳商等に

て、多くの令夫人令嬢をも見受けたるが、躰がて衆賓一同着席あると同時に、スカッター氏洋楽に和して唱歌を奏せられ、続て氏は、天帝の恵に頼て今日の挙あるを得たるを謝し、猶ほ其庇護を得て、校運を永遠に保持せんことを祈る旨を述べらる。³⁷」（句読点、ルビ・片桐）

質素な中に、来賓も多く、盛大だった開校式の様子がうかがわれる。開校式冒頭の宣教師スカッターの歌とスピーチは、この学校が宣教師の協力を得て設立されたことを、改めて出席者に印象づけたことだろう。

次いで校長の成瀬は、女子教育の必要については富田禎二郎が述べるので、自分は宗教と教育との関係についてのみ一言したいと断わって、大要次のようなことを述べた。いささか長い引用になるが、『新潟新聞』が伝える「大意」をそのまま引用しよう。

「宗教と教育とハ、互に關係を有つものなるや否ハ、篤と吟味せざる可らざることなり。宗教ハ果して教育に害ある者なる乎、抑も教育に利ある者なる乎、諸君も知らるるが如く、今日幼童に授くる唱歌中にハ造物主と云へることあり。又読本中に、神に事つると云へることあり。將又教科書に加へられたるリーダーにハ、天帝の事を説かざるなし。若し宗教は教育に害ある者とせば、以上例挙する所ハ、或ハ塗抹に付し、或ハ削除に帰せざる可らず。其然らざるを見れば、宗教の教育と互に相須て相害せざるのみならず、寧ろ密接の關係あるを知るべなり。且つ教育ハ、徳育智育体育の三途に岐つべきも、智育体育ハ末にして、其本幹は則ち徳育たらざる可らず。而して此の道德ハ、実に宗教の力に由て維持すべき者とす。蓋し宗教と云へる本義ハ、神と我との關係を明かにすと云ふに外ならず。又此の宗教と云へる中にハ、二様の意味を含蓄せり。則ち此の宇宙ハ眞神あつて主宰さるるに相違なきや、其眞神の寿命ハ如何、其眞神の能力ハ如何、と此等の事を知らんとする者其一なり。既に眞神あるを知れば、如何にして之を敬し、如何して之れに事つべきやを考ふる者其二なり。此の二様の意味合を理解して愈よ宗教貴きを知る者ハ、神明を恐れて悪事悪行を為すを敢てせず。此の心こそ、実に一身を支配すべき道義道德の本源とハなるなり。木偶若くハ泥塑人を信奉する亜細亞諸州の人民にも、多少此の効力ハ實際に現ハれざるに非ずと雖ども、奈何せん宗旨の正しきを得ざるが爲めに、親を屠り子を殺し、自ら桎梏を加へて以て教旨に称へりと為す者あるに至る。是れ豈に惑へるの甚しきに非ずや」（句読点、ルビ・片桐）

さらに成瀬は、欧米国民の道德心はバイブルによって維持されていると述べ、無神論が勢力を得た時代の米国や、宗教が衰えた時代のフランスを例に、宗教が盛んでなければ道德は地に払う、と論じ、このような外国の事例に照らして、宗教と教育とは「到底相離る

可らざる関係を有する者なること」を説いた。そして最後に、入学してくる生徒のなかには、「^{すて}己に心の曲み^{ゆが}心の汚れたるもあるならん、斯る人々ハ如何して教導すべきか、他なし眞神の力を借て之を感化するの一事あるのみ。³⁸」(句読点、ルビ一部・片桐)と結んだ。

もとより新聞記者の要約である。どの程度正確に成瀬の真意が伝えられているかは、必ずしも明らかではない。しかし、この「大意」には、宗教と教育との一般的関係は論じられていても、キリスト教に基づく宗教教育の、積極的な意義は述べられていない。知育徳育体育のうち徳育が最も重要で、これは宗教に基づかねばならない、との主張はさされていても、その宗教がキリスト教でなければならぬという根拠が示されていない。

宗教の言う「眞神」は存在するか、存在するとすれば如何にしてそれを尊崇するか、それを認識できれば宗教の意義、すなわち、その「眞神」によって自らが支配されていることを知ることができる、そしてこれが「道義道德の本源」となる、と語られている。しかし「眞神」がキリスト教の神であるとは、明言されていない。

約10年前、1878年1月の梅花女学校開校式での祝辞は「天父我を愛すれば我人を愛し、人も亦我を愛す」と始まった。ここではキリスト教の言う神(「天父」)の愛が積極的に説かれた。今回の演説には、それが無い。

本誌前号で述べたように、成瀬は、学校経営の独立自給主義をめぐる意見の衝突によって、梅花女学校教員を辞職したのであった。「金ヲ誰ニ拘ラズ、(外国人或ハ不信者)ヨリ募ルコトハ、神ノ御旨ニ合ハザルト思フ。」と、辞職を決意したときの日記に記していた³⁹。

彼は一度は、女子教育への情熱を、封印した。しかし新潟における富田禎二郎や近藤幸止との、思いがけない出会いが、この封印を解いた。当初は戸惑いながら、やがてその情熱は徐々に強くなり始めた。

「仏教王国」新潟で、キリスト教主義の女学校を維持発展させるには、いかにすべきか。そのためには、梅花女学校で否定した信者以外の寄付に頼るほかはない。彼は、そう考えた。

同時にこの地で女子教育を普及していくためには、キリスト教や西洋を前面に出すことは難しい。それを控えることこそ、県高官との協力のもとで設立した新潟女学校を維持していく最善の道である。

30歳を目前とした成瀬の戦略的判断だった。そして、この判断を、アメリカ人宣教師たちも、全面的にバックアップした。

6. 新潟女学校の教育—キリスト教教育のゆくえ

のちにアメリカン・ボードの『日本ミッション五十

年史』が記すところによれば、開校後最初の学期は、成瀬夫妻と宣教師スカッターの姉C.スカッターの3人が授業のほとんどを受持った⁴⁰。成瀬は英語と実技教科を除くほとんどすべてを教え、妻満寿枝は英語と編物を担当した⁴¹。

寄付金も順調に集まった。87年12月17日には、パーム病院のあった地に新校舎が落成した。88年8月には二階建ての寮が完成した⁴²。

成瀬が教会牧師の辞任を決意する88年1月からは、学校を会場に、医学士と理学士による衛生学・生理学と物理学の講義を、毎週2回、一般女性向けに行なうことにした⁴³。同月28日には、新潟女学校の女教諭が発起人となり「広く有志の婦女を集めて裁縫及び編物等を教授」⁴⁴する和洋裁縫会の開会式が行われた⁴⁵。

さらに3月からは富田禎次郎の提唱により毎月二回、新潟女学校で「宗教にハ余り関係せずして専ら學術上の新知識を開発する⁴⁶」講演会を開くことにした。

キリスト教を前面に出さず、広く一般向けに、裁縫や編物のような実用的知識や學術上の新知識を提供しようとする活動は、富田のような知識人の協力も得て、新潟女学校理解のために有効だった。

この年の2月1日、成瀬は教会内部の問題に疲れて牧師を辞任したのだが、その一方で新潟女学校は順調だった。牧師辞任の理由に、教会問題とともに校長職の繁忙を挙げたのも、理由のないことではなかった⁴⁷。彼は、キリスト教主義の学校をどのように運営すべきか、貴重な経験を蓄積していった。

同年9月、内村鑑三の教頭就任によって、いわゆる北越学館事件が引き起こされた。この事件、及び内村辞任後に教頭に就任した旧知の松村介石との葛藤は、成瀬のキリスト教観を揺さぶった⁴⁸。

しかし北日本ミッション第六年次報告は、新潟女学校の現況について「この市と地域にキリスト教学校に対する敵愾心が、広まったにもかかわらず、学校はその地歩を守り、着実な歩みを見せた⁴⁹」と記した。

新潟女学校開校から2年余りたった1889年7月18日と19日の『新潟新聞』に、成瀬仁蔵は「女子教育に就て」という論説を載せた⁵⁰。「女子教育の必要を論じたるの時代ハ今や早や己に昔となりぬ」と書き出した成瀬は、日本従来の「女^{おんな}大学主義の女子教育」(ルビ・片桐)を否定するとともに、「現今欧米に行ハる、所之女子教育法」を、そのまま日本に適用することにも反対した。「現今日本の女子を教育するにハ現今の日本社会に必要な婦女を養成するに適合するの教育法を施行せざる可らず」。

そして特に、「女徳涵養の主義及其方法」について取り上げ、「其徳や自由自動独立撰択的の女徳」でなければならないと力説した。この時期、のちに成瀬の教育方法のキーワードになる「自動」が、すでに使われていることは注目すべきである。そしてさらに、次のよ

うに語った。

「自ら悟り、自ら撰び、自ら守り、自ら喜んで愈々女徳に進歩し、社会の腐敗を見てハ慷慨悲憤の情を發し、以て内にハ子女を教育し良人を扶助奨励し、外にハ之れを拡充して以て同胞の兄弟姉妹を感化し社会の腐敗を清むるの塩となり社会の暗黒を照らすの光となり得る程の女徳を具へたる婦人を教育せんことを熱望するなり。」

ここには、88年1月ごろから始めた学校拡張的な社会教育実践の経験が反映しているとともに、この見解は、90年5月に、新潟女学校関係者を中心に発足した「新潟基督教会婦人会」の活動として結実した。この婦人会には成瀬の妻満寿枝のほか、生徒として雛田千尋や玉木直らも加わった⁵¹。

このように、社会の腐敗や暗黒を清め照らす、塩となり光となるためには、何よりも、「実用的教育」に先立つ「心霊的教育」が重要である。「先づ心霊の発達善化を謀つて而して後に自然と外形に及ぼさねばならないのである。

しかしここで注目すべきは、このように「女徳涵養」について熱っぽく語る成瀬が、キリスト教教育の意義について、まったく言及していないことであろう。彼が具体的に提案する「心霊的教育」の方法は、「人倫道德上の講話」と「授業上教員の感化」と「寄宿舎取締上の管理」の3点であるが、この方法は、のちに彼が創設した日本女子大学校のものと、ほぼ同一なのである。以下の「人倫道德上の講話」の説明は、日本女子大学校で成瀬がおこなった「実践倫理」の授業の構想に、そっくりと引き継がれていると言えよう。

「束縛的命的に流れたる、又ハ無責任の講話ハ無益なり。生命ある講話をなさざる可らず。生命ある講話をなさんとすれば講話者其者自身に生命を有せざる可らず。生命なき講話ハなさざるに若かず。」

もとよりこの時期、「心霊的教育」と言うとき、当然、成瀬は、キリスト教の精神を念頭に置いたであろう。約1年半前の88年2月に牧師を辞任したとは言え、彼のキリスト教への信仰は揺らいでいなかったからである。

しかし同時に、この論説で述べられた「女徳涵養の主義及其方法」は、アメリカ留学から帰国後の1896年に刊行された『女子教育』の「德育」論に、そのまま引き継がれるものであった。

論説発表後の9月からの新学期には、裁縫の時間が5時間から7時間授業に増加し、実業教育の充実が図られた。増加分の授業は、休業日だった土曜日に行われることになった⁵²。

さらに1年後の1890年。9月新学期を前に、別科・本科・高等科・英語科・夏期学科を置く、全面的な規則改正が行われた⁵³。従来の2年制の予科を3年制の別科へと拡充し、本科を4年制から3年制に短縮した。これ

らの科では普通教育のみ行うこととし、実業教育は、これとは別に夏期休業中に開く夏期学科で行うこととした。また英語学科を別に置き、別科生・本科生ともにこれを兼修できるようにした。そして本科修了後の専修科を2年制の高等科へと明確化した。この改革によって、普通教育、英語教育、実業教育のすべてにわたって充実が図られた。

そして注目すべきは、以下のような、寄宿舎教育の充実である。

「該校寄宿生の心得中には、舎内に舎監一名を置き、各室に室長一人を定めて寄宿生を管理せしめ、且つ校内には浴場運動場を設けて生徒の濫りに外出するを禁じ、又た校婢を置き生徒の自から物品を買入るゝを制し、総て寄宿生を一家族の如くに愛護し、舎監は父兄に代て之が慈育の任を負ふものとし、書信の如きも直ちに往復するを許さず、必らず取締或は舎監の手を経て受授する者とす、等の数條あり」(読点・片桐)

このような、寄宿舎生活の重視は含めた改革もまた、日本女子大学校教育の原型となったものである。

教会牧師として苦悩した教会問題、内村鑑三と対決した北越学館事件。厳しい試練を受ける中で、成瀬の教育観の核心に、徐々に変化が生じた。それは同時に、キリスト教信仰への変化を意味するものでもあった。

しかし成瀬は、そのことを自覚していなかった。

この意味で、北越学館の教師も務めた宣教師ニューエルが、1890年9月30日付で成瀬に送った手紙の内容が注目される⁵⁴。この中でニューエルは、キリスト教教育における儀式的行為と献身的行為の混同を戒め、重要なのは、何よりも後者だ、と説いているのである。

これは、儀式的行為のこだわる成瀬への忠告であるが、アメリカ留学を決意し新潟女学校長の辞任を目前にした成瀬がなお、女学校における儀式的行為に熱心だったことを意味する。

ニューエルの手紙は、成瀬への返信であった。すなわち、儀式的行為と献身的行為との関係について問うたのは成瀬の方だった。このような問題意識が成瀬のなかに生じたこと自体、成瀬のキリスト教信仰への動揺を示すものだった。問題の本質を明確にできないまま、成瀬の中に漠然と生じてきた不安。この不安の解決のためにはアメリカ留学が必要だった。この不安が、成瀬をアメリカ留学に押し出した。

『成瀬先生傳』は新潟時代の成瀬について、次のように述べている。正しい観察、というべきであろう。

「先生の年齢も既に三十を過ぎて、漸く壮年期の中ほどにさしかゝつた。いかに情熱的な天性にしても、静かに周囲の事物を達観して、批判の眼を内に見開くべき時期に近いた。(ママ) (中略・片桐) 加ふるに、これまで先生が精神的行進の炬火であつた、澤山保

羅氏も既にこの世を去つた。今や先生が高く自分の眼を挙げて観るべき時である。深く自分の心を沈めて考ふべき時である。」⁵⁵

成瀬自らも、後年、次のように語っている。

「私は十九の時に基督の弟子になるといふことを告白して、基督教会にはひつたのであつた。それから明治二十三年頃に疑問が起つて、外国に往つて研究した。」⁵⁶

〔注〕

- ¹ 『成瀬仁蔵著作集』（以下『著作集』）第1巻（日本女子大学、1974年）337頁。
- ² 茂義樹編『澤山保羅全集』（教文館、2001年）260頁。
- ³ 『増補・婦女子乃職務』（著述出版人・成瀬仁蔵、大売捌所・福音社、1887年、国立国会図書館デジタルコレクション利用）9頁。引用文中のルビは原文による。
- ⁴ 同上、56頁。この部分は『著作集』第1巻の解説（中馬邦執筆）に収録されている。
- ⁵ 同上、58頁。
- ⁶ 同上、65頁。
- ⁷ 本井康博『近代新潟のプロテスタント』（思文閣出版、2006年）74頁。
- ⁸ 拙稿「新潟の成瀬仁蔵一試練のなかの牧師生活一」（『人間研究』52号、日本女子大学教育学科の会、2016年）
- ⁹ 『明治十六年・公文録・官吏進退・司法自一月至九月全』所載の履歴書による（国立公文書館デジタルアーカイブ参照）。なお富田禎二郎は、富田や禎次郎と記されていることもあるが、本稿は、同資料に拠る。
- ¹⁰ この事情については、安藤圓秀『農学事始め』（東京大学出版会、1964年）5-21頁に詳しい。
- ¹¹ 『新潟新聞』1886年9月9日。本井康博『近代新潟におけるキリスト教教育』（思文閣出版、2007年）39頁参照。
- ¹² 『木戸孝允関係文書』第4巻（東京大学出版会、2009年）所収の木戸孝允宛富田禎二郎書簡参照。木戸と富田との交流は『木戸孝允日記2』（東京大学出版会、1967年）でも確認できる。
- ¹³ 『新潟新聞』1986年10月21日等。
- ¹⁴ 近藤幸止の履歴については、国立公文書館デジタルアーカイブの近藤幸止関係資料及び『講談社日本人名大辞典』（2001年）参照。なお田中彰『岩倉使節団の歴史的研究』（岩波書店、2002年）所載の団員名簿には収録されていない。
- ¹⁵ 仁科節編『成瀬先生傳』（桜楓会出版部、1928年）88頁。
- ¹⁶ 「北日本ミッション年次報告・1886年（第四年次報告）」（本井康博『アメリカン・ボード200年』思文閣出版、2010年）536頁。
- ¹⁷ 『文部省第十二年報』50-51頁。
- ¹⁸ 前掲『近代新潟のプロテスタント』74頁。
- ¹⁹ 『新潟新聞』1887年2月27日。なお「新潟英和女学校主意書」は、新潟の仏教会から発行された『仏教新聞』1887年4月5日にも掲載された（但しかタカナ書き）。また同紙には「新潟英和女学校規則」も掲載されているが、これはのちに『新潟新聞』5月12日に掲載されたものとは若干異なる。校名に「英和」があるところから見ると、修正前の原案だったとみられる。
- ²⁰ 佐瀬精一については、『函館市史』通説編第2巻（函館市、1990年）1443頁及び「月旦・佐瀬精一氏」（『函館新聞』1891年8月2日）等参照。

- ²¹ 阿部欽次郎については、前掲『近代新潟におけるキリスト教教育』所収の「私立新潟英学校から北越学館へ—阿部欽次郎と増子喜一郎をめぐって—」等参照。なお阿部は、1920（大正9年）年に日本女子大学校を財政支援するために設置された日本女子大学校賛助会の幹事に就任するなど、その後も成瀬の支援者であり続けた（中村政雄編『日本女子大学校四拾年史』（日本女子大学校、1942年）211頁）。
- ²² 前掲『近代新潟におけるキリスト教教育』34頁。
- ²³ 『新潟新聞』1887年2月13日。なお前掲『近代新潟におけるキリスト教教育』43頁参照。
- ²⁴ 『女学雑誌』1887年3月19日「新潟婦人懇親会」。「去月十一日新潟白山公園内借楽館にて第一会を催ほせし篠崎キチ子、近藤サダ子、尾高フミ子の発企に係る婦人懇親会ハ専ら婦人の風俗を改良するの目的にて毎月一回宛開設する筈なるが其後加入者追々増加の様なり」。
- ²⁵ 成瀬自ら、1893（明治26）年に留学中のアメリカで出版した澤山保羅の伝記*A Modern Paul in Japan*のなかで「わが校（新潟女学校・片桐）のような学校に入学したいと思っている少女たちのことをよく聞くのだが、キリスト教の原理を教えている学校に入学することを親たちはぜったいに許さない」などと、当時の新潟県的女子教育事情について、具体的な事例をあげて述べている（新井明訳『澤山保羅—現代日本のパウロ—』（日本女子大学、2001年）188頁）。なおこれらの状況は、前掲『近代新潟のプロテスタント』195-196頁等に詳しい。
- ²⁶ 『基督教新聞』1887年3月30日。
- ²⁷ 『女学雑誌』1887年4月2日。
- ²⁸ 同上、1887年4月9日。
- ²⁹ 『新潟新聞』1887年4月28日。
- ³⁰ 前掲『成瀬先生傳』90頁。
- ³¹ 同上、88頁。
- ³² 同上、90頁。
- ³³ 『創立五十年』（東京女子高等師範学校附属高等女学校、1932年）4-6頁。
- ³⁴ 同上、9頁。「東京高等女学校生徒教導方要領」。
- ³⁵ 『新潟新聞』1887年5月14日。
- ³⁶ 「北日本ミッション年次報告・1886年（第四年次報告）」（前掲『アメリカン・ボード200年』）536頁。
- ³⁷ 『新潟新聞』1887年5月22日。
- ³⁸ 同上。
- ³⁹ 『著作集』第1巻、282-283頁。
- ⁴⁰ *Fragments of fifty years, some lights and shadows of the work of the Japan Mission of the American Board, in house reproduction, 1919.*（前掲『近代新潟におけるキリスト教教育』77頁による）
- ⁴¹ 内海公子「女子教育事始め」（新潟県プロテスタント史研究会編『明治教育秘史・新潟女学校と北越学館』新潟日報事業社、1991年）33頁。同志社女学校を卒業した三輪いし・えい姉妹も教員を務めた。えいはのちに日本女子大学校第2代校長麻生正蔵と結婚した。
- ⁴² 同上、29-30頁。
- ⁴³ 『新潟新聞』1887年12月29日「広告」。前掲『近代新潟におけるキリスト教教育』45頁参照。
- ⁴⁴ 同上、1888年1月26日。同上、48頁参照。
- ⁴⁵ 同上、1888年1月29日。
- ⁴⁶ 同上、1888年2月19日。前掲『近代新潟におけるキリスト教教育』45頁、及び前掲『アメリカン・ボード200年』550頁参照。
- ⁴⁷ 成瀬が教会牧師を辞任した事情については、前掲「新潟の成瀬仁蔵一試練の中の牧師生活一」で論じた。

- ⁴⁸ この点については、拙稿「北越学館事件の成瀬仁蔵と内村鑑三—「成瀬意見書」の検討を通して—」（『人間研究』53号、日本女子大学教育学科の会、2017年刊行予定）参照。
- ⁴⁹ 「北日本ミッション年次報告・1888年（第六年次報告）」（前掲『アメリカン・ボード200年』）565頁。
- ⁵⁰ 「女子教育に就て」『新潟新聞』1889年7月18、19日（『著作集』第3巻（日本女子大学、1981年）所収）。
- ⁵¹ 前掲『近代新潟のプロテスタント』170頁。なお玉木直はのちに日本女子大学校に入学し卒業後同校教授となり、籾田千尋も女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）卒業後、附属高等女学校教諭や寮監となって成瀬を助けた（前掲『日本女子大学校四拾年史』444頁）。ちなみに籾田千尋は1908（明治41）年9月21日に死去したが、同年10月3日に日本女子大学校は「故籾田千尋女史追悼会」を行ない、席上、成瀬仁蔵は心のこもった追悼講話を行ない、さらに同月7日の大学部全体のための講話でも籾田への追悼の詞を述べた（『実践倫理講話筆記・明治四十一年ノ部』81-87頁）。これらは同年10月の『家庭週報』第160号と161号に、それぞれ「捧げられたる生涯・故籾田千尋子を記念す」「生命の帰趨」と題して掲載された（『著作集』第2巻（日本女子大学、1976年）所収）。
- ⁵² 『新潟新聞』1889年9月10日。前掲『近代新潟におけるキリスト教教育』48頁参照。
- ⁵³ 同上、1890年8月14日。同上、49頁参照。
- ⁵⁴ 中嶋邦「新潟時代の成瀬仁蔵」（『日本女子大学紀要・文学部』41、1992年）所載。
- ⁵⁵ 前掲『成瀬先生傳』95-96頁。
- ⁵⁶ 「桜楓会員修養会の席上にて」（1912年1月、『成瀬先生傳』355頁）。

（2016年9月13日受理）